

友人の死によせて

氣賀沢保規

この一・二年、私は、学生時代の友人の相づく計報に接することになった。また三十代も後半に達したばかりの、死ぬにはまだ余りにも早すぎるといってよい年齢であったのに、かれらの激しくまた苦衷に満ちた人生を

想うとき、胸はしめつけられ、いたたまれない気持ちになる。いったい自分はこれまでどのような生き方をしてきたというのか、今後どう生きていくというのか、想いはさらにそのような方向へとむかい、人生の大きな岐路に差ししかかっていることを改めて実感させられるのである。

早く逝ってしまった友人の一人、M君は、大学で四年におよぶ寮生活とともに送った仲間である。彼の死は、二年前の夏の終りのある日、同じく寮のときの友人からかかってくる突然の電話によって教えられた。会社からの帰宅の途次、駅に入ってきた国電にふれて死んだ、おそらく自殺ではないか、友人は短

かくそう伝えた。

M君の葬儀のあと、久しぶりに顔をあわせて仲間であつた。一晩痛飲した。大学卒業後、東京のある製薬会社に職を求めた彼が、仕事一筋に生きて、友人連中から出世頭だなどひやかされるほど順調に昇進をはたし、しかも幸せな家庭までもちながら、かくもあっさり死を択んでしまったことに、私たちは、同じ世代に生きたものたちのある種の帰結を感じとり、心は重かった。

想えば、私は、学生時代、寮の場を中心として、M君をはじめ数多くの個性豊かな友人にめぐりあい、何ものにも捉われない自由で愉快な交流のなかで、計り知れない多くのものを学んだのであつた。かれらは、いずれも心やさしく、鋭敏な感性を備えていたが故に、六十年半ば当時の、既成の価値感が崩れ、状況の混沌とした一つの谷間ともいうべき時代であつて、自らいかに生くべきか、人間としてこの世に存在することの証しをどこに求めたらよいか、真剣に模索し、そして傷ついた。そうしたところから最後に、自己の内なる世界に沈潜し、自らの純一性を凝視しつづけるなかで存在を確認するという、厳しく孤立した生き方にたどりついたのであつ

た。M君が、当初進んだ工学部から、中途で文学部の哲学科に転じ、さらに一転してまったく異なる職場に身を置いたのも、新たな緊張を課しつづけようとした意欲の現われとして理解されるのである。

同じことは、前後して世を去ったTさんやH君の場合にもあてはまる。Tさんは大学院まで進み、将来に可能性をもつ知性豊かな女性であったが、高校を中退して写真家の途を歩んでいた一人の男性と知りあつてからは、彼を世に出すためにすべてを投げ出して献身し、そのなかで命を縮めたのであつた。H君もまた明晰な頭脳ときどらぬ人柄によって、周囲の期待を集めながら、大学の知的退廃には耐えられないといつて辞め、最後には自ら命を断つたのである。

かれら友人たちは、一途なまでに真摯に生きようとして、傷つき疲れはて、彼岸へと旅立った。そうしたかれらの心に深くつき刺さる生き方を前にして、私は、確たるあてもないまま、ただもう少し生きてみたいと思つたのである。

（けがさわ やすのり 富山大学助教）
（前学報編集委員長）